

A-2					
主題		次世代介護機器 アシストスーツの導入について			
副題		腰痛予防 離職者の軽減			
キーワード 1	パワーアシストスーツ	キーワード 2	腰痛予防	研究(実践)期間	14ヶ月
法人名・事業所名		社福) 三育ライフ 特別養護老人ホーム シャローム東久留米			
発表者(職種)		保谷邦彦(介護主任)			
共同研究(実践)者		三島久美子(介護係長)			
電話	042-467-1561	FAX	042-467-3040		
事業所紹介	東京都東久留米市にある、平成3年に開設した設立30年目の従来型の施設です。入所者90床で3フロアに分かれています。1階28床2階35床3階27床、ショートステイ2床、計92床です。同じ建物の中に通所事業、地域包括センター、居宅介護事業があり、地域福祉に根ざしている施設です。				
<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>昨今の介護人材不足は年々深刻な状況となり、シャローム東久留米も例外ではなくこの深刻な現状に直面しています。養成校の生徒減少、それに伴い学生の施設実習者がここ数年では数名まで減少し、そのためか新卒の新人職員の入職者はここ5年で2名です。中途採用者や派遣職員での補充を試みましたが、未経験で無資格者も入職対象に入れた為多くの方が1ヶ月経たずに退職されました。そのため職員はハードワークをせざるを得ない状況で、身体的・精神的負担が多く、腰痛での退職者も少なからずいて、新たな人材獲得にも困難を極めています。ご利用者の中には体格の良い方も数名いて、ご利用者は一日の最低6回以上の移乗介助、定期的な排泄介助や体位変換、入浴介助など多種多様なケアにより職員は身体を酷使している現状です。業務をこなすだけの日々が過ぎていき、職員のモチベーションは下がり続けています。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>身体的・精神的な負担軽減が図れば、質の良いケアにもつながると考えました。人材の確保や定着ができないのであれば、次世代介護機器の導入により職員の身体的、精神的介護負担の軽減に期待をして腰痛予防や腰痛による離職者の減少、余裕があるケアの提供ができて職員の働きやすさ向上をめざし選ばれる事業所になると考えました。また、今後はどんどん増えていくと思われる次世代介護機器に少しでも親しみが湧けば、新たなものを導入した時にでも受け入れやすくなる体勢がとれるのではないかと考えました。</p> <p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>令和元年 5月 職員へ現状の業務への「ムリ・ムダ・ムラ」のアンケートを実施する。 令和元年 7月 次世代機器の活用支援事業 普及啓発セミナーに参加 施設長にアシストスーツ購入の提案をする。</p>					

導入に向けて、プロジェクトメンバーを決める。メンバーは係長、係長補佐、各フロア主任の計 5 名です。

令和 2 年 6 月 試行的導入 メーカーによるデモ機の説明会を実施する。

令和 2 年 8 月 助成金制度の申請を行う。

令和 2 年 12 月 助成金が下りる。

令和 3 年 1 月 本格的な導入に向けた手順書、マニュアル作成。

令和 3 年 2 月 5 台（2 種類）のアシストスーツを購入し導入する。

各月のフロアミーティングにて使用頻度や使用時間の検討などを行い積極的な使用を促し、継続する使用を促す。

《4. 取り組みの結果》

アシストスーツは一回や二回の介助では軽減は感じられないが、長時間（2 時間程）オムツ交換 離床臥床介助後は腰部の疲労感がかなり減少している事が感じられます。腰痛を感じている職員の声は「アシストスーツを使用する前は、何時どんな時に来るかわからない強い腰痛に、不安を抱えながら業務を行っていたが安心して業務に取り組めるようになった。」との声が聞かれたが、一方腰痛がない職員の声は「全く、軽減が感じられない、重いものを背負って負担になるだけ」との声でした。

《5. 考察、まとめ》

アシストスーツは腰痛の改善が出来るわけではなく、重さを全く感じなくなるものでもありません。かがんでの作業のやりにくさ、狭い所では使用できない、又アシストスーツを使用していると暑い事もあり、それを嫌がり装着されない職員もいる。装着の不慣れさもあり、「めんどくさい」との声も聴かれるが、装着には 10 数秒で出来るようになる。そのことから、継続して使用を促し、慣れて頂くことも大事だと感じています。この介護業界、職員一人を一人前の職員にするのにどれ程の労力や時間が必要かは、測り知れないものだと思います。腰痛で離職する介護職員が一人でも減少するなら、アシストスーツを導入した意味があると考えています。その為、離職率減少は長期的に見て行き大変期待をしているものです。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・介護ロボット開発・普及と促進 <https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/>
- ・平成 30 年度 介護ロボットを活用した介護技術開発支援モデル事業 報告書

《8. 提案と発信》

本研究では、数名の職員の効果が得られ次世代介護機器も多くの職員に発信されたが、新たなケアを導入し確立するのに、消極的な職員がいたことも分かりました。今後の介護に欠かさない、次世代介護機器を使用したケアに職員の意識統一が必要だと考えています。たとえケアワーカー不足でも質の高いケアの提供と、新たな人材がここシャローム東久留米を選んでくれるものを築き上げていきたいと考えています。